

みる つくる がたる

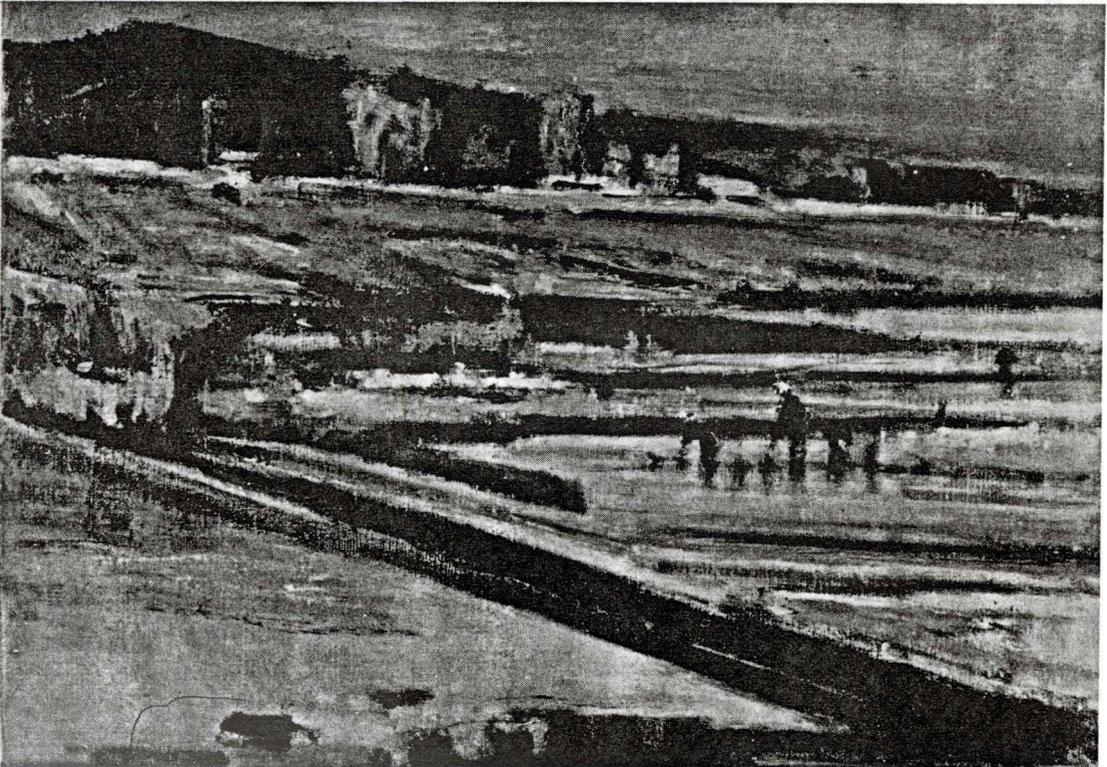
千葉県立美術館報

VOL. 2 NO.3

昭和50年12月25日発行
編集・発行人 松戸 節三

〒280

千葉市中央港1丁目10番1号
☎0472-42-8311(代表)



石橋武治「水辺初夏」

座談会

開館一周年を迎えて



出席者

浅見喜舟 (千葉県美術会長)

鈴木民三 (千葉県立美術館)

友の会長

松戸節三 (千葉県立美術館長)

司会 石井則孝

一年を振りかえって

司会 本日は、美術館開館一周年を振りかえって、過去・現在・未来という展望に立って、先生方に色々お話しして頂きたいと思えます。

浅見 館と直接関係ないかも知れませんが交通の問題ですね。それにもかかわらず今年の県展の入場者は去年より大分多かったです。これは美術館が足の問題を越えて県民に認識されてきていると思うんです。そういう点がやはり嬉しいことですね。

鈴木 確かに今迄の千葉県にはこういう施設がほとんどなかった。美術に関心を持っている人は大部分東京へ行っていたのが、この頃こちらに来るようになってきたことは事実ですね。そこで、やはり教育棟のようなものを早く作ってもらって、それを土台にして勉強もしたいという方が多いように思えますね。

浅見 認識されたということを先程申し上げたがまだP・Rが足りませんね。

司会 お話しの中で、美術館の認識が高まったと同時にP・R不足と交通問題がでてきま

したが、館長の方から一年を振りかえって、展覧会も含めまして館運営の立場から、館長 一年たってみて、この美術館を訪れる人は外出のついでに寄るといよりは、やっている展覧会そのものを目標にやってくるようです。

美術館の入館者が多いということとは県民サービスに役立っているということにもなりますので、何よりも先ず、展覧会の内容を吟味するということが大事ですが、もう一つは、足の確保することに努力するということだろうと思えます。

今年、一番入館者の多かったのが第二七回の県展ですね。その次は収蔵作品七人展、日本の子どもの絵、原勝郎展、それから日本近代工芸の巨匠展、元禄風俗画展等がそれぞれ五千名台で、県展の一万余名と比べると期間の関係もありますが案外少ない。これはP・Rの不足にもよるかも知れませんが、まだ県民が美術館の存在そのものを充分承知していないということと、県民の美術に関する関心があまり高くないように思います。学校から引率で見学にくる例は思ったより少ない。これは

距離の問題など色々原因があるでしょうが、高等学校は美術が選択になっていますから美術だけを専攻している生徒だけを連れて来るというわけにもいかないのでしょうか。

浅見 少なくとも小・中学校は引率してこようと思えばできるはずなんですがね。

館長 学校の方でもまだ美術館を活用しようというところまでいっていないんではないでしょうか。まあ概して言うところ、美術館も三年目を迎えてようやく軌道に乗ったと言っていると思います。問題は軌道に乗った美術館がどういう風に将来伸びて行くのか、それからみる・かたる・つくるのつくる施設になる教育棟ですが、これ当り、やっぱり二年近く過してきてどうしても必要だという感じを強くしているわけです。

浅見 一つ美術館に希望があるんですが、展覧会毎にその解説を録音しておいて、必ず録音を流す方法ができたらいと思う。放送されていると来た人がゆっくり味わって行けるという気がするんだが、司会 二回程友の会主催で解説会をやりましたが非常に好評だったですね。

司会 先程P・Rの問題が出ましたが、P・Rの方法で何か良い案がございますか。

浅見 千葉駅などに掲示板を作ってもらいたいと思いますね。それから市政だよりなどに毎号P・Rしていくことを**司会** それは各市町村の広報紙には毎回、特に千葉市の場合は載せて頂いています。

鈴木 千葉市には出てますね。ただ、広報紙以外にニューライフ等にはちつとも出てないんですか。

司会 今度ニューライフに特集です。

鈴木 そうですか。私はあれは効果があるんじゃないかと思えますね。

司会 やはり美術館だけが文化施設ではないので順番になつてしまふですね。

浅見 それからも一つ。これは美術館のことではないが、高校の生徒は選択が違ふからという考え方ではなくて、野球なんかどれ位犠牲を払っているかわからない。スポーツも大切だけれども芸術文化ということも大切なことだと思ふんですね。何か静的なもの目を注ぐということが少な

いでですね。

県展に思うこと

司会 よく聞かれるのですが、県展になるといわれるのですが、作品が非常に小さい。一般県民は期待をもつてきているわけが、号数の制限もあるでしょうが、その辺素直に言わせて頂くと、力の入った作品が出せないかということなんです。



の思い切った作品を陳列できる展覧会を別につくってほしいと思ふ

浅見 館長さんをお願いしたいのは、県展に限らず、幹部というか、これは美術館で選考して頂いて、こういう人達

友の会のこと

司会 鈴木先生に友の会の将来的な活動面についてお聞きしたいのですが



あのような研修的なものでも各部門について、そういう行事も少し挿んで計画に折込んでいったらいいでしょう。会員もだんだん増強されるし、関心度も高まってくるのでは。そういう行事を一遍にはできないが重点的に組んでいったら非常に良くなるのではないですか

鈴木 この間、千葉県下の古い歴史を訪ねてというバス旅行をやつて非常に良かったですね。あういう風な企画を年二回位やつたらと思う。その他に講演会・映画会、この前遠藤先生がやつてくれました

司会 会員の目標数はどの位においでおりますか。

鈴木 現在は四百名位おりますが、将来は千人位にと。

浅見 増加運動やっているじゃないか。東金の方に行かれて何かその時の記録映画のよなものはあるんですか。雨に降られて残念だったけど非常に私達の参考になったと聞かされてね。やつぱり自分で

行つてみないとわからないでしょう。

司会 あのバス旅行は語る部門のことなんですけれど、見る、語るがマッチしたわけですね。

鈴木 あれは皆な喜んでますよ。本当に、朝から帰るまでぶつと降られたんですね。写真どころの騒ぎじゃなかったんですよ。

美術館の特色

司会 とここで、千葉県立美術館は地域の美術館なんですけれど、千葉県立美術館のローカルカラーというんですか、千葉県立美術館の生きる道と

いいますか、美術館の特色をどう出して行つたらいいのをお聞きしたいと思ふのですが。

浅見 僕は、面白いと思つたのは徳島という所は非常に三味線が盛んなんですね。それがどこに現われているかという阿波踊りですね。そういうものが土地の人に非常に浸み込んでいるんですね。京都なら京都の特色がある。千葉県にはそういうものがないですね。千葉の美術館にどんな特色を持たせていったらいい

か考えておかなければいけないでしょうね。

鈴木 無形文化財的なものは結構あるだけけどね。確かに他の美術館にしても博物館にしても特色がありますね。

司会 かつて私がアンケートをとつた時に、房総という言葉を知ると何を思いますかという質問を千葉市と市川市でやつたわけでございます。そうしますと、第一位が海、菜の花ですね。その次がのんびりムード、温暖な気候と非常に抽象的なイメージをわかしておりますね。

浅見 千葉県人は幸せ過ぎるんですね。気候が良すぎて自然に恵まれているんですね。そういう所からまた一つのものが生まれてこなければいけないんじゃないですかね。

司会 美術館にローカル色を入れるとすれば、結局作品になつてくるわけで、現在浅井忠の遺作収集していますが、将来的にこういうものを収集して常設展に展示したらというものがありませんか。

浅見 簡単に言えば、千葉県の風景などを描いたものをもつと持つ必要があると思ふですね。

司会 それで昨年開館記念で

描かれた房総を取り上げて展覧会をやったわけでございます。鈴木 県内に埋れているそうした美術品も沢山あり、文化財の方で調べてきているのがありますね。あれを更におっしゃるような形にしてみらうと、いいのじゃないかと思えます。

館長 美術館の特色といえるかどうかわかりませんが、私も、今、館の職員がアイデアを出し合って近代房総の美術家たちという題をつけてシリーズで組んでいます。それを継続していく中で特色が自然に出てくるんじゃないかと思うんです。今度その四をやる計画なんですけど、何か一本筋を通していくと、やがてはそれが特色になってくる。

もう一つは、この美術館というのは教育棟の完成をまつて「つくる」という方向に力を入れる。それがこの美術館の特色になるんじゃないかという気がしているんですが。

中央でやる世界的な名作展とか有名な古美術というものを東京に向けた目を千葉に向けて、その努力はするにしても、それは特色にならないんじゃないですかね。やることもいいんじゃないか。



すから、それがそのまま運営の姿というか何か特色を左右するよう

な気がしています。展示もなるべく自分達でやる。そのよくない傾向が開館以来出てきてますから持続させていくのも特色作りの一つじゃないかと思っています。浅見 いいアイデアです。よね房総の美術家たちを一本筋を通してだんだんに線を太くしていって。

教育棟のこと

司会 たびたび教育棟の話が出てきますが、皆さん教育棟という名称はよくないと。やはり美術館に合った言葉が必要ではないかと思うのですが、何か素晴らしい名称はございませんでしょうか。

浅見 深く考えなくて教育棟というのは不味かったなあと、思うのは、学校でできる事を美術館でやらなくてもいいじゃないかという印象を与えてるんですね。だから研究棟というのはいかがでしょうか。思い付きですか。

鈴木 最初から教育棟という名前が進んだが、言葉としてパツと与える印象が確かに感心しない言葉でしたね。

館長 この間、高等学校の先生方の集まりの時に造型という言葉が出ましたが、造型棟という言葉とちよつと実体にそぐわないように。

司会 私なんか横文字を使いたくなるんですよ。県民アートセンターとかカルチャーセンターとか思い切つてイメージを変えて。

館長 アートセンターということになるのと三つの棟を総合したものになる。今考えているのは展示棟・管理棟との関連でもう一つの棟をどんな名称にするかということですね。浅見 そういうことですね。それを三つ一語にしてアートセンターとしても文句はないわけだね。

館長 いいわけだけでも、今は教育棟の名前をどうするか

ということなんで。浅見 それは教育棟という言葉でない方がいいと思う。学校教育の手伝いしているような印象を持っている。館長 いくつか館報にも書いたのですが、教育棟というと学校教育の延長の場合か或いは補充をしているような感じが強くなるような気がして、学校教育との関連づけはあつてもね。

司会 私なんか横文字を使いたくなるんですよ。県民アートセンターとかカルチャーセンターとか思い切つてイメージを変えて。

館長 アートセンターということになるのと三つの棟を総合したものになる。今考えているのは展示棟・管理棟との関連でもう一つの棟をどんな名称にするかということですね。浅見 そういうことですね。それを三つ一語にしてアートセンターとしても文句はないわけだね。

館長 いいわけだけでも、今は教育棟の名前をどうするか

ということなんで。浅見 それは教育棟という言葉でない方がいいと思う。学校教育の手伝いしているような印象を持っている。館長 いくつか館報にも書いたのですが、教育棟というと学校教育の延長の場合か或いは補充をしているような感じが強くなるような気がして、学校教育との関連づけはあつてもね。

司会 私なんか横文字を使いたくなるんですよ。県民アートセンターとかカルチャーセンターとか思い切つてイメージを変えて。

ひとこと



たので、最後たので、最後たので、最後

司会 色々とお話しを伺ってきたのですが、大分時間が経過してきまして、最後たので、最後たので、最後たので、最後

浅見 私は館長さんの聞いてすぐ思ったんですが、じゃあゆつくりでいいんだなという感じをわかせるから、五年十年計画と区切つた方がむしろいいのでは。

鈴木 そう思われたら問題ですね。司会 今日はお忙しいところ色々とお難うございました。

館長 あれを土台にして修正していこうという考え方ですね。もう少し具体性のあるものというところで今検討中なんです。今、県で新しい五ヶ年計画を作っています。私の感じでは美術館の完成には十年懸ると思

いますね。五ヶ年計画に乗ってはいけどこういう情勢になりましたから開館十年後にどういふ姿にするか、それを目標に着々と堅実な積重ねをやつていって、勿論その中で教育棟もでき、環境の整備もでき、内容の充実も図る。そうして十年たった時には特色がはつきりしてくるか。そういう積重ねの努力が必要で、美術館の整備は十年懸けて行くとかかなり理想的なものになるのではないのでしょうか。

近代房総の美術家たち—4—

石橋武治・若木山展

◆十二月二十日(出)〜五十二年一月二十五日(回)

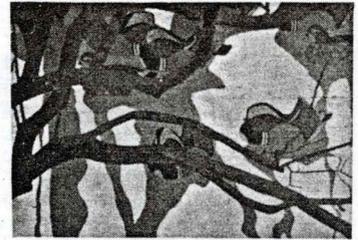
◆休館 月曜・祝日・十二月二十六日〜一月五日

近代房総の美術家たちシリーズは、房総に生れあるいは定住して近代日本の美術界において活躍し、美術振興のために貢献してきた美術家たちの再発見と顕彰をめざすものです。

昨年十月開館以来このシリーズも第四回目を迎えることになりました。特に今年度は個人に焦点を当てた企画で、四月の原勝郎展につづき今回の石橋武治・若木山展では、両氏ともに県展常任理事とし



石橋武治 湖岬



若木山 早春

て数年前まで活躍した画家であり、ともに千葉市民としてなくなられた人で、御記憶に新しい作品も多数展観いたしました。

石橋武治氏は、明治四十五年水郷・潮来町出身の洋画家で、帝展・文展・光風会・日展で活躍し、昭和四十六年歿。風土性豊かな淡々とした清潔な画風で知られる風景画家です。

若木山氏は、明治四十五年熊本市に生れ、千葉市土気町に住んで制作した日本画家で主として日本美術院を舞台に活躍し、昭和四十九年歿。装飾的で象徴的な色彩豊かな作風で知られています。洋画と日本画、作風も異なる二人の画家ですが、底に流れる作家精神を御鑑賞下さい。

千葉県芸術祭

第二七回県展 終わる

応募者も年々ふえ、本年から高校生に応募は出来なくなつた。

今回の応募総数は会員も含め二六一一点で、このうち一三五〇点が展示された。

入賞者の中には、県展史上初の夫婦揃つてという神戸さ

管理棟完成記念特別展—

浅井忠と

その師弟展

◆三月二日(火)〜四月十一日(回)
◆大人二〇〇円・大高中生一五〇円・中小生一〇〇円
(団体二〇名以上五〇円割引)

房総が生んだ美術家の中でも、浅井忠は特に傑出した存在である。

浅井忠は、日本最初の洋画団体である明治美術会の創立者であり、その代表者として脚光を浴びたが、のちにフランスに留学して多くの名作をのこした。

晩年は京都高等工芸学校の教師として、また、関西美術

ん、手と口の不自由を克服しての前田さんなどがいた。

第十七回高校芸術祭終わる

芸術祭終わる

今回の出品校は、美術・工芸部門 六六校、書道部門 一二五校と昨年に比べ両部門とも約一割増となっている。

その表現方法、内容も多彩で、幅の広がりを見せていた。

院の指導者として、大正、昭和期の洋画壇を飾るすぐれた作家の育成につとめた。

千葉県立美術館では、開館二年目を迎え、第二期工事の管理棟の完成を記念して、浅井忠の業績を顕彰すべく特別展を企画しました。今回は、

浅井忠の全貌を示すために、できるだけ年代にそつて重要な作品や関係資料を展示するとともに、工部美術学校のイタリヤ人教師、フォンタネー

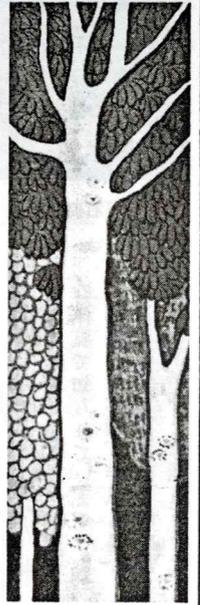
ジをはじめ、安井曾太郎、梅原龍三郎等その師弟の作品も同時に展示します。

浅井忠の画業をしのぶとともに、日本近代美術史の一端を鑑賞して頂きます。

観潮台

柏亭と八幡

石井柏亭著「柏亭自伝」の新刊を買って読んでみる。千葉県との因縁の深さを改めて感じているのが、なかに「浅井忠入門」の項があり、明治三十一年一月十七歳の柏亭は十一日をはじめ東京根岸の浅井家を訪ねたとある。当時柏亭は印刷局工生で、六月に月給十円をもらっていたが、夏ごろ脚気の気味で足がだるく食もすまず、医者も転地を勧めたので、上総八幡町というからいまの市原市八幡へ、小蒸気船に乗って転地した。めざしたのは八幡町の川上家だという。柏亭自伝によると、川上家は薬種店を営み郵便局長を兼ねながら南総学校をも経営した人望家で、市原市教委の調査では、学識もまれだった川上南洞の時代と教えられたが、柏亭の父が南洞の息子に日本画を手ほどきした因縁からともある。柏亭は十日ほどで帰京したが、こうした関係から、川上家には柏亭描く油彩の「南洞像」があり、孫の川上一之氏(県教育委員)が継承している。(在)

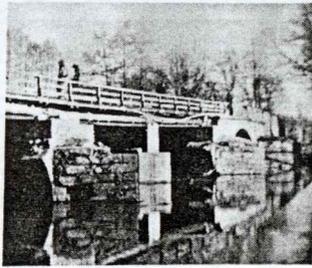


グレイの秋

高橋 在久

浅井忠がフランス留学中に長く滞在し、多くの名作を生んだグレイ村を訪ねた。文部省派遣のユネスコ活動促進のための海外視察の余暇活用だった。が、文字どおりの「グレイの秋」を体験した。

千葉県佐倉藩士になり、後に東京美術学校教授になり、明治三十三年（一九〇〇）西洋画研究のため渡仏した浅井忠は、フォンテンブローの森に近いグレイ村を好み、和田英作らとセーヌ河上流の一つロアン河の河岸段丘にある小さなこの農村風景をよく描いた。



グレイの古橋

葉した木々を眺めながら通過したが、この森の景観は林相によつては北海道の林間を行くような気分にもさせられた。森を徐行して約一時間、フォンテンブローの町を左手に見ながらぬけると、一面の田園が展開する道路の両側の並木を過ぎたと思つたら、グレイ村への道標が国道から左折するよう指示しており、彼方には待望したグレイ村の民家



洗濯場

があつた。車だから一、二分ほどで田園から集落にはいつた。

村は単純な構成であつた。河岸段丘に位置しており、二本の道路に沿つた街村で民家は東西に三百メートル、南北に一千メートルほど民家が並んでおり、その周辺に新しい民家が点在していた。久しい間訪ねたいと思つていたグレイ村かと思つと、いささかの興

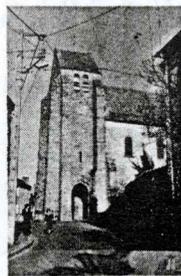
奮を感じたが、皆目見当のつかない異国の農村に降り立つた私は、同行の武部氏とともに地図を広げて、グレイ村の概要把握をはじめた。

小さな農村であり、異邦人の私たちに注目していた村人は、不思議そうに近寄りグレイ村の古橋、教会、廃墟の存在と方向を気軽に教えてくれた。さらに、浅井忠らが滞在

したオテル・シュウイヨンを見たならば「残念ながらオテルは四軒あるが、そんな名のオテルはない」といわれた。一軒ずつ聞いたらその歴史とオテル・シュウイヨンの名も確認できたかも知れないが、短い時間を惜み、浅井が描いた風景を訪ねた。

間もなくあつた。そこには浅井の水彩で見なれた石の古橋が眺望できた。ゆるい坂道を行くと、橋の中間は応急修理のままの木造だったが、全体のイメージは七十三年前の「グレイの橋」をしのばせ、河辺の林間の向うには同じく廃墟が絵のように見えた。橋の上を往来しているうちに河の西側に、これまた「ロアン河洗濯場」が屋根をつけたまま一軒残っていた。思わず「立入禁止」も無視して河辺に降り立つたら、そこには橋の向うに「グレイの森」が、落葉した梢を見せていた。

再び河辺から集落に帰り、林の間から見えた廃墟を訪ねると、小学生が二人メモをとりながら観察していたが、そこに「ギャンヌ塔 十二世紀」という解説板があつた。河辺の塔だが旧態はなく廃墟そのものだった。意外に時の経過



グレイの塔

が早いので急いで歩き、「グレイの塔」と名づけられた村の教会を仰いだら、ちょうど午後三時の鐘が鳴りわたり歓迎されたように錯覚した。

教会の西隣りは男女共学の小学校だったが、日曜日のため鉄の門を閉じ静かだった。フランス滞在六年という武部氏も、はじめて訪ねたというグレイ村を点々として、浅井の名作の舞台を認識しはじめ

村人にあれこれと質問をしてくれたが、残念ながら期待した答をもらうことは不可能だった。しかし、グレイの森も廃墟も、また古橋も教会も、さらに、河辺の洗濯場などすべてが、七十三年の歳月を忘れさせ、無言のうちに浅井の心を捉えた風景を実感させてくれた。秋深いグレイ村を訪ねて私の美術風土記への心は固定した。

(副館長)

新収蔵資料紹介

昭和五十年九月〜十一月

・浅井 忠作

「仁王像」「壁飾図案原画」

「加茂の競馬図」「鉛筆画手

本(三)」「教科書ケラ刷(

十二)」「戯作皿」の十九点

・黒沼槐山作

「花鳥図」の二点

・鈴木 章作

「七面鳥」の一点

・香取秀真作

「霊獣文大花瓶」の一点



県展出品作品

を奨励購入

開館一周年を迎えた当館では、第二七回県展を機会に、新人の発掘とその年度の美術動向を記録する目的で、同展出品作品の中から奨励購入を行うことになった。

審査には当館評価委員会があり、第一回購入作品を次のとおり決定した。

「獅子舞」(日本画)

大浦 掬水

大正四年生・千葉市在住

日本南画院・県美術会

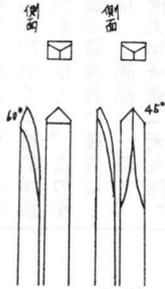
《美の根》

たがね

信田 洋

彫金といえは「たがね」。たがねは彫金の主要工具である。一般に鋳の文字で知られている。道具に使用された刃先のある鋼鉄のみを言っている訳であるが、彫金技術に用いられる「たがね」は、現在足利時代以後に制定された彫金技術の完成から特殊の鑽法に依る

もので、鑽(タガネ)と書かれるのは其の故である。たがねの種類は、其の数凡



そ大中小合せて約百本位を常に使い分けられる。たがねの質は、全部鋼鉄の棒状のもの

を刀剣のように先端を鍛え上げたもので作られる。其の大きさは大体五ミリ角前後の太さのもので、長さは約八センチ位にしてある。西洋彫金のもは、大きさも長さも日本のそれよりは三割位大ぶりにできている。刃たがねの中で一般に知られているのが、図に示される毛彫たがねである。

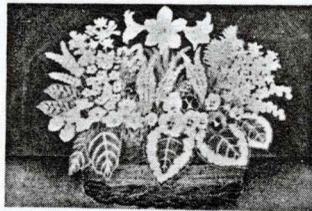
(彫金家)



「花籠」(洋画)

榎本 了三

大正十年生・市川市在住
日本水彩画会・県美術会



「秋茜」(彫塑)

本田 悦久

昭和二三年生・松戸市在住
無所属

「祈り(啓蟄)」(工芸)

小林 正利

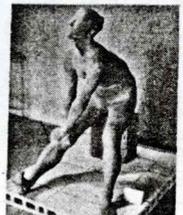
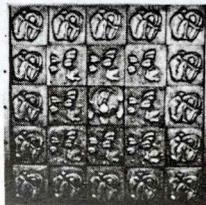
昭和一九年生・佐原市在住
無所属



「雲無心」(書)

鈴木 清香

明治四一年生・市川市在住
創女会・県美術会



神女像

アントニオ・フォンタネージ

1818~1882



146.5×19.0

正確に強調している。画面左からの光は女神を立体的に浮き上がらせ、最輝光部を地に直接胡粉で描き、次に明るい部分を木炭の上から彩色し、コントラストを明確にしている。輪郭の正確さと光線を重視する点は、フォンタネージが講義で第一の要法として教授した所で、彼の特徴を遺憾

灰色のラシヤ紙に木炭で描き、さらに茶のコンテで輪郭を

無く發揮している。フォンタネージ (Antonio Fontana) は、明治九年政府の招聘により工部美術学校に赴任し、明治十一年まで滞在した。その間我が国に初めて本格的洋画の基礎技術を伝えた。この作品は、彼が新校舎の装飾にと考えて描いた画稿の一部で、東京芸術大学所蔵「天人図」と一連のものである。新校舎は彼の滞在中には実現されず弟子達に自分の作品を与えて掃国した。この絵には、「先師ホンタネージ氏筆神女之図、木魚書房珍藏」とあり、門弟浅井忠が久しく愛蔵していたものである。

(前川公秀)

【お知らせ】

特別臨時休館

昭和五二年二月二日から
二月二十九日まで

管理棟建設工事の関係により、右記の通り特別に臨時休館致します。

スポット

松戸館長、千葉県教育功労者の表彰をうける。

多年にわたる学校教育の推進、青少年の健全育成、スポーツ及び芸術文化の振興に尽した功により、表彰をうけた。

団体展

▼登龍社・宮坂会第一回書初展
1・6〜1・11 無料

▼千葉県大学美術連盟展
1・13〜1・18 無料

▼千葉大学美術科卒業制作展
1・21〜1・25 無料

▼房総の昔話絵画展
1・20〜2・1 無料

▼第二八回千葉県小・中・高校書初展
3・13〜3・28 無料

▼弥生展
3・30〜4・4 無料

日誌抄

50年9月〜11月

9月 元禄風俗画展始まる
6 展示点数六四点

13 同展解説会(前川学芸員)

4 10月 近代日本工芸の巨匠展始まる。展示点数八七点

7 千葉テレビ、放映のため同展を取材

12 友の会で古美術及び文学鑑賞旅行(東金・成東方面)近代日本工芸の巨匠展終わる。入館者五〇四四名

1 11月 松戸館長、教育功労者に選ばれ表彰をうける

2 第27回千葉県美術展(県展)始まる。展示点数一三五〇点

10 県展出品作品の中から、奨励作品を審査、5点選出する

16 第27回県展終わる。入館者数一五八二名

20 第17回高等学校芸術祭・美術・工芸・書道展始まる。展示点数一二二〇点

編集余録

手さぐりのような状態で歩き始めた館も早いもので二度目の正月を迎えることとなりました。これも皆様のご助力の賜と感謝します。管理棟も二月には完成。来年の干支にちなむ飛躍の年になればと思います。

▼表紙作品 これは昭和43年頃、長閑な初夏の水郷を描いた作品です。四四×五二